

カリタス女子中学校 第一回入学試験

二〇二一年二月一日（午前）実施

# 国語問題

（五〇分）

\* 答えはすべて解答用紙に記入すること。

\* 字数の指定がある場合は、句読点や記号をふくむこととします。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

【I】

「アニミズム」<sup>A</sup>という言葉を聞いたことがありますか。イギリスの民族学者<sup>※</sup>タイラーが一八七一年に、原始宗教の特色を表す言葉として、はじめて用いました。すべてのものはアニマ（魂<sup>たましい</sup>）を持つている、という考え方で、文明の発達していない民族特有のものだとされてきたのです。

1、現代では通用しない古い時代の遅れた<sup>おく</sup>精神状態だと決めつけられて、評判が悪かったものです。なにしろ、動物や植物はもちろんのこと、石や水や土や道具などにも、そして自然現象にも命や魂や心があり、人間と話をしたり、精神的な交流ができるとする感覚ですから。

ところが最近では「アニミズム」が見直されてきています。それは自然に対して、現代の主流である<sup>①</sup>リチテキな、科学的な見方ではない、深い見方として、再評価されているのです。また、アニミズムは決して文明が遅れている状態ではなく、現代人である私たちも身につけている人間らしさの現れだと考えられています。

2、きれいな花が咲いているのを見たら「ラッキー」と叫<sup>さけ</sup>んだり、蠅<sup>はえ</sup>が顔の周りを飛び始めたら、「あっちへ行け」と追い払<sup>はら</sup>ったり、まるで生きものの同士が会話している雰囲気<sup>ふんいき</sup>です。そもそも花を摘<sup>つ</sup>んで飾<sup>かざ</sup>ったり、鉢<sup>はち</sup>植えの花を育てるのも、花と目を合わせるのを楽しんだり、花に挨拶<sup>あいさつ</sup>することもあるぐらいですから、アニミズムだと言えるかもしれません。ペットを飼っている人は、飼っているというよりも家族の一員として一緒に暮らしているという気持ちではないでしょうか。これもアニミズムでしょう。

つまり「アニミズム」という西洋由来のカタカナ言葉を使うから、何か特別な感覚のように感じますが、これまで説明してきたように、「生きものの同士」という感覚です。これは日本人だけでなく、人間なら誰でも持ち合わせているものなのです。百姓<sup>ひやくしやう</sup>の「稲<sup>いね</sup>の音が聞こえるようになれ」という教えも、日本人の伝統的な<sup>※</sup>天地有情<sup>てんちゆうじやう</sup>の自然観<sup>ぜんぜんかん</sup>なのです。

生きものに限らず、山も水も土も生きていただけではなく、魂（精神）を持つているという感覚は農業が狩猟<sup>しゆりやう</sup>採集<sup>さいしふ</sup>の時代から引き継<sup>つ</sup>ぎ、さらに深めて来たものではないでしょうか。そこで私はアニミズムを「万物有魂<sup>ばんぶつゆうこん</sup>観<sup>かん</sup>」と訳しています。

ところが現代では生きものの生や命まで、科学的に解析<sup>かいせき</sup>し、操作できるといふ考え方が強くなっています。蛙<sup>かえる</sup>を見て「わっ、かわいい」と言うよりも、「それはトノサマガエルで、絶滅<sup>ぜつめつ</sup>危惧<sup>きぐん</sup>種<sup>しゆ</sup>IB類<sup>るい</sup>です」と言う方が科学的かもしれません。これでは生きものと情が通わなく

なっていくでしょう。このことへの反省から、かつて生きものだけでなく、天地自然の諸々と話をしていた時代の感覚・感性が見直されて来ているのです。

「草木も生きている」と言えば、反対する人はいないでしょう。さらに「草木には魂が宿っている」と言えば、多くの人が眉をひそめ「それは宗教的な見方ですね」と反応します。

ここには(1)生、(2)生命・いのち、(3)魂・霊性、の三層があることがわかります。もとは一つだったものが、現代社会では三層に分かれてしまった、と言ってもいいでしょう。草木が芽生え、葉を伸ばし、花を咲かせ、実を稔らせるのは、「生」そのものです。しかし、その生の根源には、その生を生まれさせ、支え、終わらせ、そして再生させる何かがあるはずだと感じ、そう思う時にそれを「いのち」と命名したのです。さらにその「いのち」は、生のとくも、生を失った後も存在し続ける、もつとたしかな、それでいて姿ははっきりしないものの力で貫かれているような気がするとき、その存在を「たましい」(霊性)と呼んだのです。

ただ近年気になるのは、「生命」が科学的に説明できるものとして、「いのち」から分離していつていることです。まるで「いのち」から精神性を抜き取ったものが、「生命」であるかのような説明を科学がしがちなのは、薄っぺらな思想ではないでしょうか。

「いのち」や「たましい」のない生きものは、生きものではなかったのです。お玉杓子の死骸を前にして、そこにはもうお玉杓子の「生」も「いのち」もありませんが、済まなかったと詫びて声をかける時、お玉杓子の「たましい」はそこにまだ存在しているような気がします。「生」と「いのち」の名残として、そこで私の詫びを聞いているという気がするのです。

アニミズムと並んで、かつては「擬人法」も幼稚な遅れている表現法だと思われてきました。しかし、日本人に限らず人間は相手の気持ちを読み取る能力が発達しています。そういう能力をもっていないと人間社会(共同体)をつくることはできなかつたはずで、この能力は人間だけでなく、生きものにも<sup>②</sup>テキヨウされるようになってきました。

お玉杓子やみみずが死んでいると「かわいそう」と思うのは、人間らしい心の動きです。赤とんぼの群れに取り囲まれて、「すごい」と感動するのは、不思議でも何でもありません。自然な感覚です。この感動を家族や友人に語る時には当然人間の言葉で表現します。それをわざわざ「擬人法」と呼ぶ必要などはなかったのです。人間の言葉の使い方、自然を表現する時に、擬人法でないものを探す方が難しいでしょう。もつとも現代では科学的な表現が発達してきているので、それと比較するから「擬人」と言いたくなるのです。

ところであなたは、科学的な表現とは客観的なものだと思いませんか。ところが私たちが科学的な法則を理解するときには、擬人

法を使っているのです。その方が実感しやすいからです。「植物は太陽光線で、水と二酸化炭素から、澱粉をつくる」の「つくる」は擬人法です。4 「宇宙は二三七億年前に生まれた」の「生まれた」も擬人法でしょう。

科学者であっても、わかりやすく伝えようとすると、無意識に非科学的な擬人法を使ってしまうのです。これは非科学的だと批判するべきではなく、とてもいい文化なのです。それではなぜ「擬人法」は生まれ、今日まで使われているのでしょうか。

自然の生きものや自然現象と一体化するのが日本人の特性だと説明してきました。つい生きものや自然現象に自分の心を重ねてしまうからこそ、擬人法は自然に生まれて来ました。いくらでもある擬人法の詩歌の中から、私が好きなものを紹介しましょう。

〈 中 略 〉

「花の色は移りにけりな いたづらに我が身世にふる ながめせしまに」(小野小町・古今和歌集)

わが身と花の色を重ねる嘆きには実感がこもっています。

「悠然として山を見る蛙かな」(小林一茶)

たぶん、雰囲気からして、殿様蛙ではないでしょうか。

「向日葵は金の油を身に浴びて ゆらりと高し 日のちひささよ」(前田夕暮)

D ひまわりが浴びている金の油とは何でしょうか。太陽は小さく見えるのに。

「青蛙 おのれもペンキ ぬりたてか」(芥川龍之介)

E 説明はいらないでしょう。

## 【II】

「稲の声が聞こえるようになれ」という百姓の教えも、擬人法と言うよりは、アニミズムと言った方がいいかもしれません。稲の表情から、稲が何を求めているかを読み取るというのなら、やはり人間の能力で読み取るのですから、人間が「a」です。科学的に観察したり、分析したりして、稲の状態を知ることとあまり変わりません。そうではなく、稲が出している声が、聞こえてくるのですから、稲が

「b」で、百姓は「c」です。

つまり「声を聞いてやろう」と思っているうちは、人間が主体ですから、稲の声は聞こえないでしょう。むしろ「d」になって、

稲の声に耳を傾かたむけているときに、稲の方から声がするのです。そういう感じになるのです。もちろんその声は、自分の身体の中で、人間の声に翻訳ほんやくされます。

稲の葉が、虫(コブノメイ蛾がや稲苞虫いねつとむしなど)に食べられているのを目にすると、悲鳴が聞こえるのです。日照りが続いて水が極端きょくたんに少なくなつて、田んぼの中でも特に乾いた部分の稲は葉がマキ③始めます。じつとたえているように感じるのは、もちろん、爽さわやかな夏の風にそよいで、葉が複雑な模様を描えがいているときは、まるで踊おどっているように見えます。風の音を、稲が歌っているように聞こえる時があります。

それにしても年寄りはず「稲の声が聞こえるようになれ」と私に言ったのでしょうか。たぶん、人間がえらそうに技術を行使するのはなく、稲を「e」に立たせて、人間は「f」になつて耳を傾けなさい。そうするなら、稲という生きもののもつと深いところまで感じるができるよ。そういう境地になるなら、田んぼのことも水のこと、そして天地のこともわかるようになるよ、と教えてくれようとしたのではないのでしょうか。

〈宇根豊『日本人にとって自然とはなにか』(ちくまプリマー新書)より〉

#### 〔語注〕

- ※ 民族学者……………多くの民族の文化・歴史などを研究する学者。
- ※ 天地有情の自然観……………世の中全ての生あるものに感情があるという考え方。
- ※ お玉杓子の死骸しがいを前にして……………百姓である筆者は、過去に田んぼの水をうっかりからしてしまい、そこにいたお玉杓子を死なせてしまったことがある。

問一 ① リチテキ ② テキヨウ ③ マキ のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ① 1 ② 4 にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

ア また イ では ウ したがって エ たとえば オ ところが

問三 A 「アニメズム」を言いかえている部分を本文中から十三字でぬき出して答えなさい。

問四 B このこと とはどのようなことですか。六十字以内で説明しなさい。

問五 C 擬人法 とありますが、擬人法以外にも日本語には表現を豊かにするための様々な技法があります。次の例文ア～カの中から①「擬人法」が用いられているもの、②「体言止め」が用いられているもの、③「倒置法」が用いられているものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 例年になく寒い冬。

イ 私はしまった、かばんの中に。

ウ 宝箱のように美しい星空だ。

エ 朝早く起き、夜遅くねる。

オ 耳元で春風がささやいた。

カ 見て、見て。雲が流れていくよ。

問六 D ひまわりが浴びている金の油とは何でしょうか。とありますが、この短歌での「金の油」とは何ですか。考えて書きなさい。

問七 説明はいらないでしょう。とありますが、この俳句から「青蛙」のどのような様子がわかりますか。考えて書きなさい。

問八 百姓の「稲いねの声が聞こえるようになれ」という教えとありますが、この部分について後に【Ⅱ】のような説明が加えられ、本文中の「a」「f」には「主役」か「受け身」のいずれかが入ります。入る言葉の組み合わせとして最もふさわしいものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- |   |     |    |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |
|---|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| ア | [a] | 主役 | [b] | 受け身 | [c] | 主役  | [d] | 受け身 | [e] | 主役  | [f] | 受け身 |
| イ | [a] | 主役 | [b] | 主役  | [c] | 受け身 | [d] | 受け身 | [e] | 受け身 | [f] | 主役  |
| ウ | [a] | 主役 | [b] | 主役  | [c] | 受け身 | [d] | 受け身 | [e] | 主役  | [f] | 受け身 |
| エ | [a] | 主役 | [b] | 主役  | [c] | 主役  | [d] | 受け身 | [e] | 受け身 | [f] | 主役  |
| オ | [a] | 主役 | [b] | 受け身 | [c] | 受け身 | [d] | 受け身 | [e] | 主役  | [f] | 主役  |

問九 生き物の「いのち」を、科学で説明できる「生命」として扱あつかっていると考えられる具体例を、一つ考えて書きなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

現在高校一年生の「新(アキ)」と、十九歳さいの兄「朔(サク)」は、共にバスの事故にあい、「新」は軽傷だったが、「朔」は重傷を負い、目が全く見えなくなってしまった。「新」はそれを自分のせいだと考えて、得意だった陸上競技をやめてしまう。兄の「朔」は、そんな弟のことを思い、「ブラインド馬拉ソン」(視覚に障がいがある方の馬拉ソン)を始め、「新」に伴走者ばんそう(走者のそばについて一緒に走る人)になってくれるよう頼たのんだ。

【Ⅰ】は、馬拉ソンの練習で伴走をしている時に兄にケガをさせてしまった「新」と、「朔」の盲学校もうがっこうの陸上部コーチである「境野(さかの)」との会話で、【Ⅱ】は、その少し後での、「朔」と「新」の会話です。

【Ⅰ】

「朔の目、オレのせいなんです」

えっ、と境野は数度まばたきをしてわずかにからだを寄せた。

「バスの事故だったんだろ」

「あのバスに乗ることになったのは、オレのせいだから」

境野は安堵あんどしたように息をついた。

「それは新君のせいとは言わないよ。あの事故のことは僕ぼくも知ってる。同じバスに乗っていても、軽傷だった人もいれば、亡なくなった人もいた」

「でも、あの日に予定を変えていなかったら、事故にあうこともなかった」

新がそのことを口にしたのは初めてだった。

これまで何度も何度も同じことを考え、悔くやみ後悔こうかいし、そのたびに、でもと言いつて自分を擁護ようごし、そんな自分を新は嫌悪けんおしてきた。もう二度と、朔をまき込むくようなことはしない。兄を傷つけることだけはしないと誓ちかった。なのに今日もまた……。すり傷だと朔は

笑ったけれど、① ティドの問題ではない。

伴走ばんそうを始めたのは朔のためだ。朔に頼まれたから、朔が望んだから、朔が求めたから。でも、いつしか新は、走ることを楽しむようになっていた。そんな自分の思いを否定し、ブレーキをかけてきた。あつてはならないことだからだ。

なのに今日、あの瞬間しゆんかん、夢中むちゆうになっていた。

A  
あのととき自分は、伴走者ばんそうしやではなかった——。

「朔君は自分の目のことを新君のせいだなんて思っていないよ」

「わかってます」

そんなことは新にもわかる。兄がそういう人間でないことも知っている。

「だったら」

「朔は、強いから」

こうべを垂れ、新は膝ひざの上でこぶしを強く握にぎった。

「そうかな」

ほそりと言った境野の顔を、新は驚Bおどろいたように見つめた。

「彼かれは、そんなに強い人間じゃないと思うけど」

「そんなことっ」

「弱いから、強くなるうとするんじゃないの？」

境野はプラカップの表面すいてきについている水滴すいてきを指で拭ぬぐいながら、イスの背せにからだをアズけた。<sup>②</sup>

「朔君、盲学校もうがっこうに入った当初は完全に人と関かわることを絶たちやってね。学校でも寄宿舎きよしゆかでも誰だれとも口をきかなくて、寄宿舎では四人部屋よにんべだったんだけど、いつも部屋べの隅すみで膝かかを抱かかえて顔をふせているような具合で。心理しんり的な引きこもりっていうのかな。そんな具合だったらしいよ」

新は C  
目を見開いた。

そんなはずはない。朔は失明しつめいしたとわかったとき、家族の誰たれよりも冷静ひたんだった。悲嘆ひたんして泣く母親ははや失明しつめいを認めず別の病院びんを探たづねる父親ちちに、大丈夫だいじゆうぶだからと頷うなずき、盲学校もうがっこうへ行いきたいと言いった。

「朔君、盲学校に入ってから今年の春まで、家に帰ってないだろ」

こくりと頷くと、境界はゆっくりまばたきをした。

「寄宿舎っていうのは、自宅から通うことが困難な場合に利用するところで、利用者はけっこういるんだ。でも週末は全員自宅に帰る。で、また週の初めに寄宿舎に戻って生活をする」

知らなかった。そんなことは母親からも誰からも聞かされていない。

「でも朔は」

「週末や長期の休みになると、おじいさんだか誰かの知り合いが住職をしている寺で世話になってたって」

「寺？」

「詳しいことはわからないけど、その寺はいろんな事情のある人を受け入れているらしくてね。家に帰りたくないっていう朔君のことを、ご両親が相談されて、引き受けてもらっていたらしい」

「なんで……」

そこまでして家に戻らなかった兄のことが、新には理解できなかった。

「そこが彼の弱さ。で、強さ」

「……………」

「見えていたものが突然見えなくなるって、相当な恐怖だと思う。晴眼者の僕がその怖さをわかるなんてことは絶対に言えないんだけど」

新は黙って頷いた。

手も足も自由に動く。からだは健康なのに、目が見えないというだけであたりまえにできていたことができなくなる。自分で服を選んで着替えることも、ひとりで出かけることも、自販機で飲みたいものを買うことも、どれひとつヨウイではない。いまの朔を見ている、わかる。

「そういう姿を見られたくないっていうのと、見せたくないっていうのが彼にはあったんじゃないかな。家族や親しい人にはとくに」  
家族を悲しませたくないから、大切な人を苦しませたくないから、そういう姿を見せたくないから、悲観されたくないから、可哀そう

だと思われたくないから……。新は唇を強く噛んだ。朔なら、そう思うかもしれない。

「D 彼が変わったのは夏休みのあとだよ。なにがあつたのかは朔君も言わないし、先生たちも聞かなかつたようだけど。つきものが落ちたみたい、歩行訓練なんかの自立活動も勉強も積極的に取り組むようになった。僕は月に二度くらいしか行つてないけど、九月に朔君を見たときは正直驚いた。声を聞いたのも初めてだったしね」

境野の口から語られる朔は、どれも新の知らない姿ばかりだった。夏の間になにがあつたんだろう。なにが朔を変えたんだろう――。

新は浅く息をした。

「そんなに変わるもんかな」

「変われると思うよ、僕は」

「そうだろうか、と新は首を傾げた。少なくとも、<sup>E</sup>自分になにも変わっていない。

「新君だって変わったよ」

えっ、とかぶりをあげると、境野は微笑んだ。

「人って変わるんだよ。よくも悪くもね。でも、変わってしまうのと、変わろうとするのは違う」

## 【II】

朔は大きく息をつく、「ちよつと待ってる」と部屋を出ていき、筒状になつている画用紙を持つて戻ってきた。

「見てみな」

戸惑いながら新はそれを受け取ると、ゴムを外して画用紙を開いた。

画面に大きく、笑顔の男子の顔が描いてある。<sup>④</sup>世辞にもうまいとはいえない。けれどよく見ると、絵に沿って小さな盛り上がった点がついていることに気がついた。

「その絵、点を指でなぞるとオレにもちゃんと見える」

「これって」

「あのバスに乗つてた女の子がくれた」

「……………」

朔と事故のことについて話すのは初めてだった。

「その女の子、バスの中でも絵を描いていたんだろうな。で、クレヨンを落としちゃったんだ。水色のクレヨン。それがオレの席のそばに転がってきて、手を伸ばしたんだけど拾えなくて。で、シートベルトを外して通路に出たとき、事故が起きた。あとのことは覚えてないけど、たぶん吹っ飛んで、頭を打ったんだと思う」

あの事故で大きなケガや亡くなった人は、シートベルトをしていなかったと聞いた覚えがある。けれど朔はシートベルトをしていなかった理由を言わなかったし、両親も朔を問うようなことはしなかった。

「タイミングが悪かったんだよ」

机のイスを引いて、朔は腰かけた。

「もちろんオレがこうなったのは、その子のせいなんかじゃない。オレが勝手に拾おうとただけで、頼まれたわけでもない。でも、めぐちゃん、あ、その女の子の名前だけど。めぐちゃんは事故のショックでしゃべれなくなっちゃって。四カ月たって声が出るようになって。それでお母さんにオレのことを話したんだって」

朔は淡々と話を続けた。

「めぐちゃんのお母さんたち、いろいろ調べたんだろうな。オレのこと知って、去年の夏頃かな、うちに手紙くれたらしくて。要は、オレに会いたいってことだったんだけどさ。母さんは反対したらしいけど、父さんがオレのいるところを教えただって。で、そのときオレが厄介になってた寺に来てくれて、めぐちゃんから、それもらった。めぐちゃん、お母さんと一緒に点字で書いてくれたんだよ。でもオレさ、そのとき点字なんてまったくわからなくて」

そう言って **F** ふっと笑った。

「すげー恥ずかしかったよ。めぐちゃんは一年生になったばかりでさ。そんな小さい子が一生懸命書いてオレんどこ来てくれたのに、オレはなにやっつてんだろうなって。きつと、来るまで怖かったと思うんだ。お母さんにしてもめぐちゃんをオレに会わせること、悩んだと思う。うん、絶対悩んで、迷ったと思う。でも来てくれて」

朔は膝に肘を当て、手のひらを組んだ。

「あの頃、オレぜんぜんダメで、盲学校に行ったのだから、ただ逃げただけだと思う。みっともないだろ」  
ううん、と新は唇を噛んで かぶりを振った。

「めぐちゃんからもらった画用紙にも、なにが書いてあるのかわからなくて、でもそれをめぐちゃんに聞くこともできなくて。そりゃさうだろ、めぐちゃんはお母さんと勉強して、点字打ってくれたんだよ。それをオレが読めないって。で、自分で読めるようになるうと思っ  
て勉強始めたんだ。事故にあつてから初めてオレ、自分でなにかしようって思った」

新はじつと画用紙を見た。

朔らしき男の子の顔の上に、横書きで  ひらがなが書いてある。

—— おにいちゃんえ

もういたくないですか

おにいちゃんがいっぱい

みえるようになりますように

その文字の上にも、盛り上がった小さな点、点字記号が並んでいる。

「この先、もしもどこかでめぐちゃんに会ったら、ちゃんと笑ってほしい。笑って、顔をあげて、たくさん見えるものがあるよって、言えるようになってほしい」

「……それと走ることと、どう関係あるの」

朔はふつと息をついた。

「見たいんだよ、オレは。世の中にあるもの、なんだって見たい」

「……………」

「できなかつたことができるようになることも、わからないことがわかるようになることも、知らない世界を知ること、全部、オレにとつては見ることなんだ」

ぐううううと、扇風機せんぷうきの微かな風音が朔さくの声に混じる。

「見ると、目に映るものだけじゃないんだよ」

朔さくは柔らかに目を細めた。

「オレにとって、走るとさういうこと。新はオレにいろんなものを見せてくれる」

〈いとうみく『朔と新』(講談社)より〉

〔語注〕

※ 晴眼者せいがんしゃ……視覚に障がいを持たない人のこと。

問一 ① テイド ② アズけた ③ ヨウイ ④ 世辞 のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二  にあてはまる言葉としてもつともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア なれなれしい      イ はればれしい      ウ よそよそしい      エ たどたどしい      オ ぎょうぎょうしい

問三 A あのと時自分は、伴走者<sup>ばんそうしや</sup>ではなかった。とありますが、「新」はなぜそのように考えたのですか。本文中の言葉を使って四十字以内で答えなさい。

問四 B <sup>おどろ</sup>驚いたように見つめた。 C 目を見開いた。 とありますが、この二つの表現が示している「新」の気持ちとしてもつともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア Bでは境界が急に弱気になったのを心配する気持ちが表れ、Cでは突然信じがたい話を始めた境界を不思議に思っている。  
イ Bでは境界の疑問に対する強い怒り<sup>いか</sup>が表れ、Cでは朔に関する新事実を知って境界の言葉を信じるしかないと考えている。  
ウ Bでは境界が自分の本当の思いを見抜<sup>ぬ</sup>いたことへの驚きが表れ、Cではさらに境界の深い物の見方に深く感じ入っている。  
エ Bでは境界の見当外れな言葉にあきれる気持ちが表れ、Cでは見えないうそをならべる境界に強い不信感を抱いている。  
オ Bでは境界の予期しない反応に対する意外さが表れ、Cでは境界の言葉がとても信じられずに強く否定しようとしている。

問五 D 彼が変わったのは夏休みのあとだよ。 について、【Ⅱ】をよく読み、次の(1)・(2)に答えなさい。

- (1) 「朔」が「変わった」のは、どのようなことがきっかけですか。三十字以内で答えなさい。  
(2) 「朔」は、どのように「変わった」のですか。変わる前と変わった後がはっきりとわかるように、六十字以上、七十字以内で答えなさい。

## 問六

E 自分は何も変わっていない。とありますが、どのような点で変わっていないのですか。その説明としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

A バス事故で兄を失明させたのに、再び兄にケガを負わせてしまった点。

I 「朔」と兄弟であるのに、他人の境界の方が兄の情報を知っている点。

U 兄の失明を自分の責任と考えて、自分を責めて兄に遠りよしている点。

工 陸上が得意であるので、何より走ることを優先したくなってしまう点。

オ 兄を心から尊敬し、弱さなど少しも持ち合わせない人物だと考える点。

## 問七

F ふつと笑った。とありますが、ここでの「朔」の様子や心情としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

A 失明の悲しみにおぼれて投げやりになって、全てを冷やかな目で見つめている。

I 「めぐちゃん」に出会うまで現実を見ず、おろかだった自分を思い起こしている。

U 「めぐちゃん」の優しさとかわいらしさを、ほほえましく心に呼び起こしている。

工 「新」はがんこなので分かってももらえないと感じ、強いあきらめの気持ちでいる。

オ 素直になれない「新」のために、場をなごませるような演出を加えて話している。







